

上司と部下とガーベラと

※ この小説には、B.L.やおい・耽美

と呼ばれる表現、性描写が含まれています

http://pan2.wakwak.com/~kiss_co/

昔から人に嫌われていた。こういうと非常に被害妄想的であるが、残念ながら今だ未婚であるのと友人らしい友人がいないことから、それは真実であると言わざるを得ない。しかしながら、勉強と職務というのはコミュニケーション能力をほとんど使わない為、自分でいうのも何だが好成績を収めてきた。社会というものは、一日中仕事ばかりしても真面目だと捉えてくれて、決してそれ以外の能力が欠落していると思われない。実に私にとって居心地のいいところである。特に、伝票と帳簿ばかり一日中眺めている経理職は私の天職ともいえた。しかし、それが私一人で回る規模の支社であれば、の話であるが。

「鏡、君のとこの迫田くんから退職届けが出たよ。いい加減、部下が辞めていけば自分が大変だってことに気づいたらどうだ？」

総務部長が私に電話を掛けてきた時、私は再度迫田が入れてくれたお茶を受け取ったところ

だった。彼女は無口で私が言うことにも「ハイ」と言つて黙々とこなす女性だった。私も色々経験して、失敗しても怒らないように努力してきたつもりだった。今までで一番巧くいきそうな予感がしていた矢先でこの始末。一体どうしたらいいのかまるで分からなかった。

私は電話を切つて、迫田が入れた茶を飲んだ。薄くてまづかった。

色々と彼女に聞きたいことがあつたが、とりあえず目の前の仕事を終わらせることに集中することにした。結局考えたところで私が出す結論は間違いだらけだということなのだ。それから裏切らない仕事に力を注いだ方がいい。給料を貰っている以上、私は企業に雇われ、結果を出すことが全てなのだから。

私が課長をしている総務部経理課は、給料計算、経理事務を行っている。決算期以外は、本当に毎日毎日伝票ばかりを書き、請求書を眺めるだけの仕事だ。

部下は三人いる。

一人は篠塚という役立たずの優男で、簿記というものを分かっているかも疑問な男だった。専務の甥っ子で、誰もが腫れ物に触るようにようのために増長して手を焼いていたところ、人材不足の我が部署に放りこまれた経緯がある。徹底的に叱りつけ鍛えているところだが、おかげで最近は何事もしなければ目も合わせない。最もいなくなつて欲しい人間の一人だが、どういうわけか全くやめる気配を見せぬまま五年目に入った。

もう一人は、三年目の酒見である。大舞台には全く向かない気の弱い男で、私が叱りつけると、まるでネズミのごとく小さくなって小刻みに震えてしまう。だったら失敗をしないように注意すればいいものの、毎回似たようなミスを犯す。私の血圧は上がりっぱなしで、いつか酒見の為に血管が切れそうな勢いである。この男もどういうわけかやめる気配がない。

最後の一人は、退職届けを直属の上司を無視して上層部に持っていった紅一点の迫田で、この経理課の中では一番仕事ができた優秀な部下だった。外見は地味で陰気だったが、私語が少ないのは非常によかった。彼女には本当に頑張つて欲しかったのだが、一年ともたずいなくなることになる。

私はもう一口まずい茶を飲むと、仕事を黙々とこなしている迫田を見た。口元が歪んで震えていた。笑っているようにも見えたが、退職届を出して私を馬鹿にしているのか、それとも何か思い出し笑いをしているのか、はたまた元々ああいう口の形をしていたのか、皆目検討がつかなかった。おそらくこういうところが部下が離れていく原因なのだろうと思う。私はデスクの上の書類ばかり見すぎているのだ。部下の扱いが巧い人間というのは、きつと数字や書類より人間を観察するのが好きに違いない。

私は脳の端でそう思いながら、この日も篠塚

を三回怒鳴り、酒見に書類を叩きつけ、迫田の入れた茶を残した。相変わらず仕事は進まず、今日も残業になるのは確実だった。命令したところで残ってくれる部下などいやしない。私は次々と遠慮なく退社していく部下の背中に「お疲れさん」と乾いた声を掛け、またデスクに視線を下げたのだった。

「鏡？」と、名前を呼ばれて顔を上げると、壁の時計が深夜十二時を示しているのが目に入った。思わず窓を見ると、暗闇のガラスに自分の顔が映っている。

今日もまた気づけばこんな時間である。その割には思った程仕事は進んでいない。請求書の発行は毎月二十日。パソコンから打ち出したままで放置されているものを一枚一枚封筒に収め、郵便料金後納の判子を押し、総務の郵便用の箱に放りこまねばならない。

「お疲れ様です」と私は内心うんざりしながら

反射した自分の顔に向かって言った。本当は経理課の入口に立つ男に言ったのだが、自分自身への慰めも兼ねて。

「おい、自分に向かっていっているのか？」

苦笑の混じった声を発したのを聞いて、私はようやく男に顔を向けた。

総務部の部長である椎名に。

「さあどうですか・・・」と私が曖昧に答えて眼鏡を上げると、椎名は相変わらずの余裕に満ちた瞳を湛え、手にぶら下げているコンビニの袋を私に見せた。

「毎日ご苦労だな。どうせまだ帰らないのだから？ちよっと休まないか」

椎名はこちらの意見も聞かずに経理課に入ってきてくると、近くのデスクから椅子を持ってきて、私のデスクの前につけた。

うんざりしているのは仕事のこともあるが、この部長の椎名もかなりやつかいであった。応援しているのか、邪魔しに来ているのかよく分

からないが、毎日私の残業中に現れては、一緒に夜食を食べていく。私より少し上の四十後半で、一番の出世頭といえた。機転がよく利き、よくいえば頭がよいし、悪く言えばずる賢かった。人の使い方が巧く、私と違って部下の評判もよかった。迫田が彼に退職届けを出しにいったのも納得できなくもない。

「まあ喰え」

椎名はそう言って、コンビニのおにぎりを私の手に押し込んだ。鮭といくらで、少々塩分過多な組み合わせだった。私が不服に思いながらも一つにかぶりつくと、椎名は苦笑しながら煙草に火をつけていた。

あたりは精密機器の稼動音と椎名の紫煙を吐き出す吐息ばかりが響いていた。私はそれらをBGMに、おにぎりを腹に収めて仕事を続けた。椎名は私の仕事に手を出してこない。ただ静かに見詰め、ただひたすら私を待ち続ける。捕らえ方によっては酷く嫌な上司だが、彼は私の作

業が遅かろうが早かろうが一言も文句を言わなかった。ただ、いつも深夜一時を過ぎると口にする言葉がある。私に向かつて囁くように。

「もう終電は過ぎてしまったよ」

確かに私は電車通勤で、この時間を過ぎれば家に帰れないことは決定するが、わざわざ時刻を教えてくれているわけではあるまい。一体どんな謎かけなのかこの日も全く理解できずに、ようやく請求書の封筒詰めに入った時はもう一時半を過ぎていて、椎名は五本の煙草を吸い、私は目の疲れを覚えて眼鏡を外すと目頭を押した。

「好きだ、鏡」

ふとそんなことを言われて視線を向けると、彼は困ったような悲しそうな複雑な表情で私を見つめていた。

「・・・ありがとうございます」

冗談なのか本気なのか私には判断がつかなかった。のでとりあえずそう返事をした。きっと椎名

も疲れているに違いなかった。部下の扱いも知らず一人仕事を抱えて膨大な残業代が掛かっている男がきつと哀れに思えてそう口走ったのだろう。似たような年月を仕事に費やして、どうしてこうも立つ場所が違うのか。椎名は要領よく出世コース。私は右往左往してようやく課長どまり。しかもやっていることと言ったらヒラの時と少しも変わらない。何をやっているのか。私は知らず知らずのうちに自嘲していた。緩む口元を隠すことなく、私は封筒の口を全て閉め終えたのだった。

「そろそろ終わりそうだな」

椎名は私が封筒を束ね始めたのを見て椅子から腰をあげた。短くなった煙草を空いたコーヒーク缶に入れ、椅子を元通りの場所に戻す。喰い散らかしたコンビニのゴミを分別し、背広についた煙草の灰を払う。

私はお疲れ様でした、と彼の背中を見送り、後片付けをし、二時には事務所の電気を消して

鍵をかけ、近くの漫画喫茶で仮眠を取る。

そう、いつもなら。

「部長」と、どういうわけか私はこの日、彼の背中に声を掛けた。姿勢のいい上背が一瞬強張って、ゆっくりと彼は振り返った。

「なんだ？」

光の加減だろうか。出入口付近で振り返った椎名の顔には少し影ができていて表情が読みにくかった。

「部長は電車ですか？」

一瞬なんのことも分からなかったに違いない。彼は少し目を丸くすると、ようやく私の言葉の意味が分かったのか「いや、車だよ」と言った。

「電車通勤は君だろう」

そう。私だ。

「部長は明日公休ですか？」

椎名は珍しく饒舌に質問を繰り返す私に不審感を覚えたのか、少し気難しい顔をした。「休みは君の方だろう」

そう。私だ。

「どうした？何がいいたい」

ポケットに両手をつ突っ込んで、私に対して斜に構えているその姿は相変わらず飄々としていて、先程口走った言葉が幻のように思える。私は一体彼から何の言葉を引き出したくて声を掛けたのか。

私は眼鏡を押し上げると、ようやく椎名に向かつて「お疲れさまでした」と頭を下げた。

「ああ」

彼は少し小首を傾げてそう頷き、立ち去りかけたが、ふいに「ああ、そうだった」とまたこちらを振り返った。

「今日の夕方、迫田くんから色々話を聞いた。今度時間ができたら話しよう」

色々、という言葉に私は少し引っかかりを感じた。何だか聞きたくないような気もした。それが私の行動を遅らせたようで、こちらが口を開く前に椎名の背中ではドアの向こうに消えてし

まっていた。

朝を迎え、私はいつも通り漫画喫茶の個室で目を覚ました。毎日のように利用している為に顔なじみになった店員に「おはよう」と挨拶し、勘定を払って外に出た。外は少し肌寒かった。

こういう風に迎える朝というのは本当に複雑な気分で、朝まで酒を飲んで店から出た時のそれに似ていた。決して爽やかなものではなく、疲労と高揚と後悔が体内を駆け巡り、凜とした朝の空気と太陽はそんな私を責め続けた。

重い足を引きずり駅のホームに立ち、私は自分の家への電車が来るのを待った。こんなビジネス街の始発に乗る様な人間は私と同じような仕事馬鹿か、アルコール漬けの人間だけのように思われた。

一陣の風を載せて一つの電車がホームへと入ってきた。出勤にはまだ早い時間なので人の入りはまばらだった。私は電車に足を踏み入れ、空

いている席に座ると、また泥沼のようにずぶずぶと睡眠をむさぼるのだった。

夢を見た。

いつものように机に座って伝票を整理し、目の前には煙草を吸っている椎名がいる見慣れた光景だった。夢なら夢らしく、違うことでも起こればいいのに、と私は夢の中で思っていた。いや、逆だ。夢だからこそ聞けることもある。

「部長、どうしてあの時あんなことを言ったんですか？」

「あんなこと？」

「私のことを好きだとおっしゃった」

「なにいつてる。おれはそんなことは一言も言っていない」

日焼けした快活な笑顔が瞬く間に歪んでいき、私はどういいうわけか少し、傷ついていた。

ふと目を開けると、目の前には多くの人間がつり革につかまって揺られていた。私はこの見

慣れない風景に動揺したが、平静を装って自分の腕時計を見た。確か電車に乗ったのは六時半くらいの始発だったはずなのに、驚いたことに針は七時を指していた。私の降りるべき駅は当の昔に過ぎていて、あるうことか折り返していた。

空気が淀み、色々なニオイがしていた。酸素自体が足りないのではないかと思えるほど息苦しかった。皆、無表情で電車に揺られていた。どの顔も疲れていて、この一日に何の喜びも楽しみも期待していないようだった。

私は少し眼鏡を上げて髪を撫でると、また再び目を閉じた。先程一瞬見た夢が気になって仕方がなかった。椎名はあるとき、確かに私に向かって「好きだ」と言ってきたはずだったが、今となっては自信がない。実は夢だったり、妄想だったり、何だかその方がよっぽど真実味があるような気がした。結局今度は一睡も出来ずに私は降りるべき駅に降りた。

朝の九時近くになって私はようやく帰宅することができた。万年締めっぱなしのカーテンで薄暗い部屋は妙に心地よかった。少し湿って肌寒い、そんなコンクリートのような冷たさが私にはお似合いだった。

スーツを脱ぐと私はそのままベッドに横になったが、電車内で質の悪い睡眠を取ったせいかちつとも眠気がわいてこなかった。私は時間を持て余し、昨日読み損ねた新聞を隅から隅へ目を通して、普段見もしないワイドショーをぼんやりと眺めた。仕事中毒になっている人間というのは大抵趣味というものがないに違いない。結局仕事以外にすることがないから、それに依存し、それにしがみつく。きっとプライベートが充実している方が、仕事も何もかもがうまくいくような世の中なのだ。例えば、椎名のように。「私はおかしいな」とぼそりと呟いた。なんだか先程から彼のことばかり頭に浮かぶ。

私は眼鏡を外してテーブルの上に置くと、思

わず笑った。そして着ているものを全て脱ぐと、シャワー室に入って頭から熱い湯を浴びた。

私は昨夜から浮かれていた。自分が見上げてきた相手に好かれていることに純粹な喜びを感じていたのだ。夢心地というのは大げさではなく、明らかに彼の一言で私の心は浮ついている。私は結局人に飢え、愛情に飢えてきた人間なのだと言感する。相手が女だろうが男だろうが、結局は自分を愛して欲しかったんじゃないか。私は自頭を撫でて欲しかっただけではないか。私は自分の単純さに行きつき、また自嘲し、そして切なくて顔を手で覆い、しゃがみこんでしまった。背中から後頭部にかけて降り注ぐシャワーは温かいはずだったが、まるで雨のごとく私の心と身体を冷やし、そして私を孤独のどん底にまた叩き落としたのだった。

翌朝は想像通り最悪の目覚めだった。習慣となっている寝酒の量は変わらないはずだったが、昨日は相性がよくなかったらしい。私は髭を剃

りながら、目の下に浮かんだクマを眺めた。元々よくない血色が益々悪くなり、病人のようだった。

いつもより一本早い電車で会社に向かったが、この時間帯は利用者が少ないらしく大層楽だった。席に座ることもできたし、新聞も読むことが出来た。道を歩いても人通りはまばらで、実に爽快だった。目覚めの最悪な気分が一転した。私のそんな感情に影を指したのは、二十四時間営業の牛丼屋の前を通った時だった。もともと胃弱な私は、早朝から牛丼を平らげる人間の気が知れなかった。今日も胸焼けをおこしながらもチラリと店内に視線を走らせた時だった。

見慣れたスーツの男がいた。
椎名だった。

狭いカウンターで小さく折った新聞を眺め、口には煙草。真剣に記事を読んでいるらしくこちらに気づく様子がない。

私は迷った。声を掛けるべきか。いや、掛け

てどうする。私は一昨日の言葉にまだ翻弄されていた。ゆっくりと歩は進めていたが、視線を椎名から離すことができなかった。心の中で気づけ、と念じている自分がいた。彼が私に気づけば、私は仕方なく彼に挨拶にいける。そう思った。しかし彼は私が店を通り過ぎても気づくことなどなかった。

なにをしているのか。

私は眼鏡を押し上げると、何度と分からない自嘲をした。どす黒い感情が胃に溜まっていくのを感じた。それは蛇のようにトグロを巻いて確かにその存在を私に示したのだった。

会社に着き、いつもは施錠するために使う鍵を今日初めて開錠に使用した。誰もいない所内は冷たく一昨日と同じだったが、日の光がブラインドから差しているだけ気分が違った。私は真っ直ぐ經理に向かって、いつもの席に腰掛けた。すっかり私の形になった椅子に身を任せるのは苦痛どころかリラックスできた。私は完全

に仕事中毒らしい。くるりと椅子を回転させて、座ったまま真後ろのブラインドを空けると、いつもの日常がそこにあった。違うのは真っ先に来ているはず椎名が隣の部屋で煙草を吸っていないことだけだった。

私は早速パソコンの電源を入れ、その起動の間に伝票と領収書を眺めた。決算期は三月。それまでに伝票の入力と試算を出すのが経理課の仕事だった。上層部は毎月のデータを出せと言い、各部署は書類の提出期限を守らない。この支社の規模が拡大するにつれて、私は自分自身の能力の低さを実感する。仕事の処理能力もそうだが、何よりも部下教育。今いる人間が私と同等、いやそれ以上の動きを見せればきつと回るのだ。計算上は。

私は伝票書きをしていた手を止め、眼鏡を外した。こめかみを指で刺激して、目頭を押す。

最近、偏頭痛に悩まされることが多くなった。寝不足が原因か、それともまともに横になつて

寝ていないからか。いや、その両方かもしれない。そもそもただの頭痛だという楽観的な発想が出来る年でもないから、もしかしたら大病かもしれない。私はそんなことをうだうだ考えながらも椅子から立ち上がった。

どちらにしても心配してくれる人間などいないことにふと気づいて、私はまたやりきれない思いになった。やれやれ、我ながら救いようのない性格をしている。

洗面所で顔でも洗おうかと事務所を横断している時に、何か聞こえた。一瞬パソコンの起動音かと思ったが時計に目を向けて納得した。誰かが出勤してきてもおかしくない時間だ。私は気にせず廊下に出るノブに手を掛けた。その時。「マジで気づいてないのよ、毎日飲まされてるのが雑巾の絞り汁ってさ。ホント、ああはなりたくないったら！」

そんな甲高い笑い声と共に、私の手からノブが消え、ドアが向こう側に動いた。

この空気を何とあらわしたらよいのだろうか。目の前には笑いを張り付かせてこちらを見上げる迫田の顔と、ぎよつと目を見開いている他の部署の女性がいた。私は至極冷静に彼女達を見下ろしていた。彼女の顔は段々白くなっていき、口は酸素を欲する魚のように動いていた。

「なんでこの時間に」とその形は言っていた。

私はどんな顔をしていたのか分からない。ただやたらと頭の芯が冷えていて、ゆっくりと彼女達の脇を通り過ぎ、予定通り顔を洗いに行った。長く感じる廊下を歩き、洗面所の蛇口を捻る。冷たい水が勢いよく出、排水口に吸い込まれていった。私はただそれを呆然と眺めた後、視線を上げた。少し汚れた鏡に目の下に隈を作った痩せた男が映っていた。私がじっと見詰めていると、彼は不思議と笑みを浮かべた。私が訝しげに眺めていると、彼はなおも笑っていた。

その達観したような顔が腹立たしくて、私は思い切りその顔に拳をたたき付けた。彼の笑み

はひび割れ、赤い飛沫が舞った。私の拳はじんじんと痛み出し、その痛みに私は腹を抱えて笑い出しそうになった。

馬鹿馬鹿しい。世の中全くくだらない。

私は眼鏡を外すと、ハンカチでレンズについた血を拭いた。そして拳から流れる血を簡単に拭うと、そのまま洗面所から出た。廊下に出ると、出勤してきた他の部署の人間と多くすれ違った。いつもは挨拶をしてくる彼らが今日は口をつぐんでいるようだった。私のワイシャツに飛んだ赤い染みが気になっているのか、それとも手から流れる液体に気がいつているのかわからないが、やたらと廊下が静まり返っていた。私は拳の血を止める為、反対の手で拳を押さえたが血は止まるどころか私の指の間からどンドン湧いて来た。

経理事務所のドアを空けると、驚いたことに迫田が席についていた。私は俯いたままの彼女の後頭部に向かって「おはよう」と声を掛けた。

いつの間にか出勤してきていた篠塚と酒見は私の方など見もせず「……ございます」と相変わらずの挨拶をした。今日ばかりは彼らの態度がありがたかった。色々詮索されては迷惑だ。それにしても、と私はハンカチで拳を押さえながら苦笑した。我ながら何て馬鹿なことをしたのか。年ばかり重ねたが、根っこの部分は何も成長していないとみえる。

私は迫田の横顔を眺めた。彼女の顔は蒼白で視線は先程からずっと机の一点を見つめていた。一体何を考えているのだろうか、と私は考えたが分かるはずがなかった。もし彼女の考えが少しでも理解できたなら、雑巾の絞り汁を飲まされることもなかっただろうし、退職届けがでることもなかったに違いない。

「迫田くん」と私は静かに声を掛けると、彼女は大げさに肩を揺らした。そして首だけこちらに向けた。

「お茶をいれてくれないか」

彼女は私が何を言ったのか一瞬分らない様
だった。視線は私の顔を見、そして拳に重ねら
れたハンカチの赤い染みへと移動した。そして
ノロノロと立ち上がると、茶を汲みにいくどこ
ろか、バッグを手にしてドアの向こうに消えて
いった。彼女はその間私を顧みることもなく、
頭を下げることもなく、終業時間にもなった
かのように当たり前に、静かにその場を去って
しまった。

私はそんな彼女の背中を呆然と見送った後、
腹の底から怒りが湧き出てくるのを感じた。私
は立ち上がると、乱暴に廊下に出るドアを開け
た。廊下には早足で外にしようとする迫田の背
中があった。

「おい迫田！どこに行く！」

彼女の背中が驚いて震えたのが分かったが、
足を止める気はなかったらしい。そのまま彼女
は駆け足同然で出口のある扉の奥へ消えた。

私は怒りが収まらず、右手を白い壁に叩き付

けた。塞がりかけていた傷が再び開いたのか、廊下に赤い飛沫が少し飛んだ。

ざわざわと遠巻きながら他の課の人間が私を見ていることに気づいたのは、おそらくほんの数秒後だっただろうが、私にはかなりの時間が経過したような感覚があった。経理の事務所からの恐る恐る様子を伺っていたらしい酒見は震えながら、「あ、あのお茶だったら僕がいられますので」と言った。私は「頼む」とだけ短く答えて、経理の事務室に戻ることにした。

「課長」と、席についた私の目の前に箱ティッシュが差し出された。篠塚が妙に神妙な顔つきで目の前に立っていた。

「すまん」と私はそれを受け取り、手の血を拭いたが、彼は一向に席に戻ろうとしなかった。「どうした」

「すみませんでした」

篠塚の口が動いたのはややしばらく経ってからで、私は思わず眉間に力が入った。

「なんだ」

「実は知ってたんです」

「ほう？」

「あの女が色々課長にやってるって知ってたんですけど、その、すみませんでした」

がらにもなく責任を感じているらしい篠塚は、茶色の頭を下げて私の目の前につむじを晒していた。

「具体的に何やってたのか知っていたのか？」

「いや、その分からないんですが、きっと相当なことをやってたってのはわかります」

私が仕事で怒鳴りつけることは日常茶飯事だが、感情的になったのは今回が初めてだからか。私はため息をついた。怒りに任せて行動して後悔しないことはない。冷静になれば大したことではないのに、恥ずかしいことこの上ない。

「篠塚」

「はい」

「煙草あるか？」

私の言葉に篠塚は少し驚いたような顔をしたが、胸ポケットから煙草を出して私に渡すと、ライターで火をつけてくれた。何年かぶりに吸う紫煙は私の全身に染み入るようだった。

ふう、と一呼吸すると、じつと目の前に突っ立っている篠塚に向かって言った。

「いいから仕事しろ」

「は、はい」

私はあたふたと机に戻った篠塚を横目で見ながら、電話を手を取った。この騒動はきつとあの男の耳に届いているはずだった。本来なら直接事情を説明しに行かねばならぬのだろうが、彼に対する感情が複雑で気が進まなかった。電話で申し訳ないが、ここは許してもらおう。

コールが三回鳴ったところで椎名は出た。

「ずいぶん派手だったじゃないか」

第一声がそれだった。声の感じからすると面白がっている気配があった。あの時彼は廊下にはいなかったが、ドア越しにも聞こえたのかも

しない。

「すみませんでした。反省しております」

私は目の前にいるかのごとく頭も一緒に下げた。

「何が原因だ？」

私とその質問に言いよどむと椎名は深いため息をついた。

「まあいい年なんだから程ほどにしておくことだ。今まで積み上げてきたものを一瞬でなくすことだってある。手を抜けとは言わないがね、ゆとりを持つことも大事だぞ。仕事でもプライベートでもだ」

いつもより更に低い声でそう言われて私は大層耳が痛かった。

「今日は残業はなしだ。分かったな」

最後は突き放すようにそう言われ、電話が切れた。

私は受話器を置いて、酒見が入れてくれた茶を飲んだ。濃くて美味かった。

ふと、視線を上げると、篠塚も酒見も私が気になるらしくちらちらと視線を向けていた。私は短くなった煙草を、持ってきてもらった灰皿に押し付けると、彼らに向かっていつも通りに仕事の命令をした。ちよつとしたトラブルが朝にあらうが、業務上には関係ない。私は頭を切り替えて仕事に没頭した。昼を過ぎて夕方になった頃には、私の拳の傷は塞がり、ぱさぱさに乾燥した血の固まりが皮膚を覆っていた。そして意外な一面を見せた篠塚は相変わらずふて腐れた顔をするようになり、酒見は叱られすぎてネズミのように小刻みに震えていた。終業時間になると、いつも通り二人は揃っていなくなっていた。

私は事務所に一人になると、眼鏡を外して目を閉じた。何だかとても疲れていた。仕事は相変わらず亀のような歩みで残業しても追いつかぬ。ただでさえ時間が惜しいのに、今日は残業をするなど命令まで下ってしまった。私がそん

なことで素直に定時に帰ると椎名は思っていないだろう。おそらく様子を見にくるだろうと簡単に想像がついた。

私は一瞬迷ったが、結局自分は仕事するしか能がないのだと思い、眼鏡を掛け直して書類のチェックを始めた。特に今日やらなくてはいけないものではなかったが、いずれはやらねばやらぬ仕事だった。

作業はしばらく順調だったが、夜七時を過ぎたあたりから、集中力に欠けてきた。何度も時計を見たり、肩が凝ったと腕を回す。

今日はやけに落ち着かない自分に戸惑いながら、誤魔化し誤魔化し仕事を続けた。やはり疲れているのか、そろそろ仕事を切り上げようかと思っていると、人の気配を感じて視線を上げた。

椎名が呆れた顔でこちらを見ていた。

「帰れと言ったぞ」

私は彼の姿を見てほっとしている自分に気づ

いた。そんな感情に戸惑いながら、「帰るつもりでしたが？」と私がうそぶくと、彼は腕を組んで鼻を鳴らした。そこでいつもと違うことに気づいた。いつもより来る時間が早いというのもそうだが、今日は珍しく手ぶらだった。いつもならコンビニの袋をぶら下げているというのに。

「残業しないんだろう？」

私の心を読んだかのように彼は言い、何も持ってきてないと腕を広げてアピールした。そして私が想像していなかった言葉を吐いた。

「そら、行くぞ」

椎名はそう私に言い放つと、顎で外に出るよう告げた。いったいどういうことなのか、と私が訝しげ思っていると、彼は苛々したようにこちらに近づき、ぱんと一つ手を打った。

「おい、さっさとしたまえ。おれは待つのは嫌いなんだ」

結局訳も分からず私は椎名の後ろについて会社を後にした。こんなに人がいる時間に外に出るのは久しぶりだった。

ビジネス街から程近い飲み屋街を抜けて、私が今朝方椎名を見つけた牛井屋を通り越し、まだ我々は歩いていった。しかも椎名は私などまるで忘れてしまったかのような歩行スピードだった。いや、実際忘れられているのではないか。くるりと突然振り返って「なんで君はいるんだ？」などと言ってこないだろうか。私はそんな不安に駆られながらもスーツの背中を追いかけたのだった。

しばらくしてようやく彼の行き先が分かったような気がして、ほっとしつつも首を傾げた。なんてことはない、会社が月極で借りている青空駐車場だった。色々な車を縫って歩いて、椎名は黒のクラウンに乗り込むと、すぐにエンジンを掛けた。私は置いてきぼりで一体どうしたらよいのか途方にくれた。本当にここまできて

忘れていたとは言うまいな。

車が動いて私の前に横付けにされた。椎名はじつと無言で私を見ていた。乗れとも帰れとも、何でいるんだとも言わなかった。ただ私を見た。

冷静に考えれば椎名と職場の外で付き合ったことはなかった。私は仕方なく助手席に乗るフリをしたが、実はかなり緊張していたのだった。

運転中も椎名は無言だった。会社を出てから彼はほとんど口を聞かない。いや、もともと饒舌な男ではなく、私の仕事を待つ間もむやみに話しかけたりしない上司ではあった。いつもなら居心地がいい空気感であるはずが、この閉鎖的な環境のせいだろうか、今日ばかりは妙に息苦しくて、ぐいとネクタイを緩めた。

「どうした」と急に椎名が言った。

横目でこちらを伺っている。

私は困った。息苦しいなどと言えるわけがない。すると椎名は視線を前に戻していつも通りの口調で言った。

「緊張しているのは君だけじゃないさ。おれも柄にもなくあがっている」

私は椎名に視線を向けた。動揺など微塵も感じない横顔だった。いったい何を考えているのか分からなかったが、彼の私に対する言動を理解できた試しがないことを思い出した。

私は眼鏡を外すと、ハンカチを出してレンズを拭いた。

「そういえば」と椎名が言い、徐にラジオのスイッチを入れた。聞こえてくるのは野球中継。

「お好きなんですか？」と私は眼鏡を掛けて苦笑しながら言うと、椎名はこちらを見ずに「君は嫌いか？」と問うた。

野球は丁度5回表を過ぎたあたりだった。スター選手ばかりをそろえた球団が一点をリードしていて、弱小チームがそれを追いかけていた。アナウンサーの実況と解説は、ただうるさいだけだった。

「あまり好きじゃないですね」

私が素直に言うと、椎名は「ふうん」と言っ
てボリユームを下げたが、切ろうとはしなかつ
た。

微かに聞こえるラジオの音をBGMに車は走
り続けた。私たちは他愛のないことを話す行為
をだらだらと続けた。最近の経済のことや選挙
のことや、今騒がれている事件のことなど。何
度目かの交差点を過ぎてもなお、それは続いた
が、私は彼の目的地が分からず落ち着かなかつ
た。

「いったいどこに向かっているんですか？」

私が耐え切れなくなって聞くと、椎名はこち
らをチラリと見ただけで何も言わなかった。私
はそんな彼の態度に車に乗ったことを後悔した。

ラジオは野球の中継を続けている。ヒットが
出ようが、エラーが出ようが、アナウンサーは
興奮していたが、それを聞いている椎名は無表
情のままだった。

私は彼が結局何も言おうとしないので、窓の

外を眺めることにした。これから飲みに出かけるらしいサラリーマンの群れを見ながら、朝乗っている電車での彼らの表情とは真逆であることを可笑しく思った。

私はそんな風に普段見慣れない光景を楽しんでいたのだが、段々その景色が見覚えのあるものに変わって来て不安を覚えた。

まさか。と思った。気のせいだと思いたかったがそれは無駄だった。我々の乗せた車はゆっくりと私の近所の路地に入り、一つのアパートの前でゆっくりと停車した。車のハザードランプの音が無常に響いた。なんてことはない、椎名は私の家まで送ってくれただけだった。

「ありがとうございます」

私は内心の動揺を悟られないようにそういうと、ゆっくりと車から降りた。そして彼の車が発進するのを見送ろうと思った。

私は一体何を期待していたのだろうか。女々しいことに私は彼が私を強引にどこかに連れ出

してくれるとばかり思っていた。これから何か変わることを期待し、彼が私に告げたたった一言に振り回された。

「まあ、ゆっくり休め」と椎名は車の窓をわざわざ開けてそう言った。暗闇にぼんやりと見える彼はいつも通りだった。先程の息苦しいような感覚もなく、居心地のいい、仕事の合間に会う上司だった。

「部長」

途中まで上がっていたパワーウインドウが私の呼びかけでぴたりと止まった。椎名は首をかしげながら「何だ？」と問うた。

「部長はこれから真っ直ぐお帰りになるんですか？」

「いや」と彼は不思議そうに答え、そして自嘲気味に笑った。「君と同じで仕事が溜まってる」

「明日も仕事ですか？」

「いや、ようやくの休みだ。・・・どうした、何がしたい？」

そう何が言いたいのだろうか、私は。分かって
いることは、先程の息苦しきは決して不快では
なかった事実だ。もっと車に乗っていたかった。
くだらないことを彼と話していたかった。

私は落としていた視線を上げて椎名に言った。

「もしお時間がおありでしたら」

「うん？」

「少し上がっていきませんか？」

椎名は私の提案に驚いたようで、目を丸くし
絶句した。私はそんな反応に戸惑い、言ったこ
とを後悔した。いたたまれなくなり再び視線を
落として、自分の靴の汚ればかり眺めた。しば
らくの沈黙の後、私の耳に届いたのは「いいの
か？」と少しうわずった声だった。私が視線を
上げて椎名を見ると、彼は複雑な表情を浮かべ
ながらこちらを見詰めていた。

他人を部屋に入れたことはなかったので少し
緊張したが、椎名はドアを開けて靴を脱ぐなり

「君の根城だな」と微笑んだ。

「汚いところすみません」と私は頭を下げて、椎名にソファアを勧めた。そして部屋にひとつしかないマグカップにインスタントコーヒーを入れて、彼の目の前に置いた。

「君の分は？」

椎名は楽しそうに部屋の様子をぐるりと見回し、マグカップに焦点をあわせるとそう尋ねた。私が一つしかないのと言うと、少し考えた後に「頂こう」と言って口を付けた。

「なあ、こっちに座れよ」と椎名はコーヒーを一口飲んだ後、彼の隣のソファアを指差した。

ソファアに大の男が二人も座ると、大層スプリングが下がって椅子がたわむ。何十年も使っているから支えきれないのだ。バランスが崩れて何だか身体が傾いているのを感じた。

椎名の方に。

私はどうしていいのかわからず、自分の家だと言うのにひどく緊張していた。斜めになり寄

りかかりそうになるのを、必死に耐え、何でもないフリを装う。自分は何をやっているのか、と頭で嘲笑う。

そんな自分をよそに、椎名は随分くつろいでいるように見えた。コーヒーを美味そうに飲み、ふと壁に掛かっている時計に視線を向けた。そしてテーブルの上のリモコンを取った。

「野球ですか？」

私は勝手にテレビをつけてチャンネルを変えだした椎名に呆れながら言うと、「君は嫌いかもしれないが、ちよつと結果だけでも」

と未練がましくチャンネルを合わせだした。

ぱつと球場が映し出されると、先程まで負けていたチームが逆転していた。もう八回の裏だ。

椎名はコーヒーのマグカップを両手で遊びながら、前かがみになって中継に釘付けになった。私はそんな彼を横目で見ながら、ラジオよりはいくぶん静かな実況を聞いていた。興味が無い人間にしてみれば、この単調な映像は眠気を誘

うだけだった。私の瞼は段々と重くなって来た。必死に斜めになる体に抵抗してきた意味が分からなくなってくる。頭の手で「もう身体の力を抜いてもいいんじゃないか」と声がした。その一方で「いや、だめだ」という逆のことをいうものもいた。私はだめだと言ったその意識に、どうして駄目なんだ？と問いただしていた。それはその問いに口ごもり、そしてついに私は身体の強張りを解いて、ゆっくりと身体を何かに預けたのだった。

温かい夢を見た。何だか幸せな温かさだった。昔味わったことがあるその温度を私は思い出すとしてた。

そうだ、これは体温だ・・・。

ゆっくりと目を開けると、私は何かに寄りかかっていた。視線の先には自分の手を握っている大きな色黒の手があった。絡められた指の関

節は太くごつごつしていた

「起きたか？」と声がした。

「あ、どうもすみません」と私は彼の肩から顔を離すと、こめかみに痛みが走った。眼鏡をしたら、うたた寝したためにツルで圧迫されたのだ。

「眼鏡なんかしてるからだ」と私の痛み気づいたのか、握られていた手はずれ、椎名は私の眼鏡を持ち上げた。眼鏡がなくとも分かるくらいの距離に彼の顔があった。充血した目をしているのに、泣いているように潤んでいた。ゆっくりと彼の顔が近づいてくるのが分かったが、私の頭は故障したかのように無反応だった。

軽く唇が重ねられ、すぐに離れていった。

近くで私を見つめる椎名の目は何だかいつもと違う表情をしていて「いやだったか」と低い声が尋ねてきた。

私は正直何と言ったらいいか分からなかった。

椎名が言う「好き」が本当にそういう「好き」

だったのかと少し驚き、どう反応すべきか困った。

「いやというか、なんというか」と私は正直な言葉を綴った。「不思議だ」

椎名はその言葉が思いがけなかったらしく、一瞬目を見開くと、

「はは、こりゃあいい」

私は明るく笑った彼を見て少しほっとしていた。いつもの椎名が隣にいた。笑いの残った顔で彼は右手に持っていた眼鏡を私に返してくれた。私はレンズ越しに彼を改めて見る。張りのある健康的な褐色の肌。

「ゴルフ焼けだ」と椎名は笑って、片方の淡い色の甲を私に見せた。

いつの間にかテレビは消されていて、時計の時間を刻む音だけが響いていた。椎名はゆっくりと、そしてしっかりと私の手をとった。私は随分体温の高い椎名の指が、私の指をもてあそぶのを不思議な気持ちで眺めた。ふと、彼の手が

私の手を掴み、持ち上げる。

なんだろうと思つて、椎名の方を見れば、彼はゆつくりと私の人差し指を口に啣えた。

私は今度ばかりは心臓が暴れた。先程のふいうちとは違って、今度の椎名は明らかに私を誘っていた。目が私を捉えたまま、舌は私の人差し指を撫でるように蠢く。

私は硬直し、どうしたらいいか分からなくなり、ただ椎名の目に釘付けになっていた。

「不思議か？」と椎名が私の指を唇に引っ掛け、たままそう呟く。低く。

私はされるがままだった。なんというのか、椎名がどのように私を攻め立てるのか興味があった。男から見ても魅力的な男がどのように私を陥落させる気なのかと。私は受身になりつつも、傍観しているような別な人格がいるようだった。冷静な自分とそうではない自分。いつそうのこゝと夢中になれたほうがお互いの幸せではないのか。

「鏡」と椎名に呼ばれる。先程と同じように充血して、少し潤んだ瞳が目の前にある。

「好きだ」

聞き間違いではなく、椎名は私にそう言った。あの時のように疲労の戯言などと言いつつ、訳などできぬ状況で。彼は私の指をしゃぶりながら「好きだよ」と妄想のように言い続けた。彼に掴まれた腕は拘束と表現した方がいいくらいびくともしなかった。

まさかと思つて私が椎名の股間を見ると、しっかりと見て分かるくらい隆起していた。

私は椎名ほどの男が自分のような人間に興奮していることに純粹に驚いた。

椎名は私の指から手首に舌を動かした。目を閉じて酔つたように舐めていたのに、今度は一転してこちらを見ながら手首にキスをした。

その挑むような目つきに、ぞくつと何かが身体を走る。思わず口で息をすると、椎名がのり出して私の身体に覆いかぶさってきた。

手首を拘束されながら口づけ。今度は性急に舌が入ってくる。生温かい奇妙なものが私の口の中を蹂躪する。

私は正直キスの感触より、股間に当たる椎名の固いものの方が気になった。ごりごりと擦り付けるような感触。激しくて、硬くて、痛みが走る。

私と同じ世代の男が、まさにオスの顔で私を見つめる。男の魅力というのはこういうものに違いない。私は正直もつとこの男と絡みたかった。体温を感じて、私をどんどん誘惑するこの男をもつと感じたかった。しかしそれをするにはここは狭すぎた。

「待ってくれ」と私は思わず、上ずった声をあげた。上司という考えがこの時頭から消えていた。私の声色に何か違いでも感じたのか椎名は私の上ののったまま、視線を和らげる。

拘束していた手をそっと離して、椎名は優しくキスをした。

唇を通じて気持ち伝わると初めて知った。そしてそんな優しさとは裏腹の、椎名の欲望を感じる。

「すごい」と私は思わず言っていた。

そんな妙な感想に椎名は少しぽかんとした後につこり笑った。

「もっと凄いことしたいんだが許してくれるのか？」

私は思わず喉を鳴らす。下半身の一点が熱くなる。

「もっと激しいのか？」

「ああ」

「もっと感じるのか？」

「ああ！」

椎名の目はぎらぎらと私をねめつける。私のもも椎名に負けず劣らず隆起していて、布越しに当たるお互いをもっと感じたくなっていた。「だったらもっと私を攻め立ててくれ」

ぐいと私は椎名の股間に己のものを押し付け

ると、椎名は乱暴にソファアの前のテーブルを蹴飛ばした。

激しい音がして、テーブルは向こう側に飛び、ひっくり返りこそしなかったがコーヒーの入ったマグカップが激しく上下する。

私たちは絡まったまま、ソファアの前に転がった。もともとスプリングがおかしかった椅子なので段差などないに等しい。椎名は性急に私のスーツの上着を脱がして、シャツの前を乱暴に開いた。激しく乱暴に椎名は私の乳首を吸い上げた。感じたことがない快感と痛みに私は酔った。「もつと、もつと吸って」

痛い、気持ちいい。段々熱くなる己の雄がばんばんに張り詰めていく。私は自分のものに触れず、椎名のものに手を触れた。布越しでも熱さが伝わる。硬いそれを握ると、胸を舐めていた椎名が「・・・っ」と呻いた。その顔が色っぽく。

私は上体を起こして、椎名の口にむさぼりつ

いた。自分で舌を入れて椎名の口腔の犯す。

ズボンを脱がそうとしている椎名を手伝って尻を上げ、下着ごと剥がされる。それだけで布に擦られて反応する。爆発寸前を目の前に晒しながら、私は、私に跨ったまま全身の服を脱ぎ去っていく椎名を眺めた。日焼けしてない肌は、うつすらと色が淡いが、もともと色黒らしくあまり差がない。

彼の中心で猛々しく誇示する欲望がある。

私は彼を迎えた。

直接触れ合う私たちの欲望は、熱く、ぬめった感触が気持ち良かった。椎名は私を犯すように腰を揺らし、お互いの肉棒を擦り合わせた。私の中心はもう限界で先端から漏れ出した精液がゆるゆると私を追い詰めていった。

「鏡」と椎名は私を見詰めたまま、夢うつつという顔で声を掛けた。

「おれは君と繋がりたい」

私はその言葉に痺れた。もうどうでもいいか

らめちやめちやにして欲しかった。何も考えられないようにして欲しかった。いや、実際私はもう溺れていて、息も絶え絶えだった。

「もっと攻めて、もっと追い詰めてくれ」

私はそう返事をした。

はちきれんばかりの中心への刺激は、私の要求に反してストップし、その代わり未知なる蕾へ移行した。

私はもう自分自身がどろどろに溶けていつている感覚があった。滴り落ちて尻の周りをべたべたにしているのは自分の精液であるのも認識していた。もしかして緩やかに私は一回イってしまっていたのかもしれない。それくらい全身が痺れていた。

「くう、・・・アア、いい」

私はゆっくりと侵入してくるそれに震えた。初めてなのに抵抗がなかった。不快感が逆に興奮にすりかわり、私の脳を犯していった。精液を潤滑液として進入してくるそれを私は飲み込

みたくて思わず締め付ける。指を増やして広げていく椎名は、こちらを充血した目で見詰めたまま。

「早く欲しい」と私は思わず言っていた。

椎名はそんな私を睨むように見詰めて指を抜くと、一気に私を貫いた。

「ああアア」と私は痛みに悲鳴を上げ、段々と麻薬のように快感に繋がっていく過程を感じた。痛いのが気持ちよかった。私の中心から、びゆくびゆくと精液があふれ出た。イツた感覚があつたが、これが何回目か分からない甘美な痺れが全身を包む。

椎名は私を奥の奥まで攻め立てた。快感はずつと続いて、私の肉棒からは何度も何度も精液が溢れた。腰が浮き、椎名の熱くて太い欲望が行き来し、内臓に刺激が伝わった。犯され、おかしくなり、世界が真っ白になっていく。ぼんやりとした世界の中で、はっきりしていたのは椎名の色黒の顔が快感に震えていることだった。

椎名の唇の奥から、吐息と呻きが混じったような声が溢れた時、私の中に熱いものが注がれていった。何度も何度も椎名は私にそれを注ぎ込み、私は蕾からどろりと溢れるその液の感触に満足しながら、最後に一つ、大きく震えたのだった。

私は眩しくて目を開けた。目の前には電灯が強すぎる光を私に注いでいた。眼鏡のレンズに所々白いものが付着していて、視界が少し不明瞭だった。

「起きたか？」

低い声に首を曲げると、ソファーに座ったスーツの足が見えた。私は痛む腰を叱咤しながら起き上がった。身体はきれいに拭かれていて、バスタオルが掛けられていた。

「シャワー借りたぞ」椎名は組んだ足を直して私に告げた。黒いスーツには少し染みがあつて、私は口元を歪めた。

「落ちなくてね。恥ずかしいがクリーニングだ」
私は裸に掛けられていたバスタオルを腰に巻いて、椎名の隣に座った。ぼんやりした頭で眼鏡を取ると、バスタオルの端でレンズを拭く。

「すごかった」と私は正直な感想を漏らした。
きれいに身づくろいした男の隣に座っていると、先ほどのことが幻のような気さえしてくる。
私は激しい夢を見て、椎名がそんな私を見ていただけではないかと錯覚する。

「鏡」と隣の椎名は微笑んだ。「またキスさせてくれるか？」

優しい上司の顔を見て、現実だったと実感する。私の答えを聞かぬまま、椎名は私の下唇に吸い付いた。

「こんな私のどこがいいんです？」

私が疑問だったことを聞くと、「今更それかと椎名は呆れたようなため息をついた。

「理屈じゃないだろう、こういうのは」

私が納得いったようないかないような反応を

すると、椎名は難しい顔をした。「具体的な表現は難しいに決まってる。君は男だし、おれより老けてるし、仕事は要領が悪いし」

「これは失礼しました、部長」

私が言うと、椎名は「怒るなよ」と笑った。

「それは冗談としてだ。おれはずっと君が好きだったよ。本社から、経理課の調査指示を受けて、君の前で仕事を見ていて、きつと全然回りが見えない人間なのだろうなと思った。おれが好きだということも、きつとずっと気づかないだろうと思った。口を開けて告白しても、目で君を犯しても」

そこまで言って自嘲ぎみな乾いた笑いがまじる。

「家に送り届けようと車に乗っている時、おれは柄にも上がってしまったってハンドルを持つ手が震えて困ったよ。君の体臭を微かに感じるだけで勃起しそうだった」

椎名のその告白に私は思わず笑ってしまう。

随分青臭いことを言っている。思春期じゃあるまいし。

「笑いたければ笑えばいいさ」と椎名は笑みを湛えたまま言った。

意識をそらそうとして野球を聞いたり、他愛もない会話をしたが全然意味がなかったと聞かされて、私は何だかあの息苦しさに合点がいった思いだった。

「さあてと」と椎名が徐に腰をあげたのは深夜零時をまわったところだった。私は彼を見上げながら「仕事ですか？」と聞いた。

「今日中に終わらせないといけない大仕事があつてな。ああ、もう昨日か」

ふわあと緊張感なく椎名はあくびをして、伸びをした。黒いスーツの染みが先程より目立って見える。

「その染み、きつと手ごわいですよ。私に似て頑固そうだ」

「そうかな」と椎名は染みを見る。「きつとそ

う見えるだけさ」

出て行く彼を送ろうと腰をあげたところがかずちのように走り抜ける激しい痛みに襲われる。思わずソファーに手を付くと、送らなくてもいいぞ、と声が掛かった。そして思い出したように言う。

「そういえば、迫田くんの件を話すと約束していたのを忘れていた。時間ができたら電話するから」

こんな時に嫌なことを思い出させる。私は眼鏡越しに睨みつけてやった。

「部長、本当に私に惚れてるんですか」

返って来たのは楽しそうな笑い声。椎名は靴を履いてドアを開けると、一度だけこちらを振り返った。

「好きだよ。部下である君もな」

翌日私は五分遅刻して出社した。先に席に就いていた篠塚たちの頭上に「おはよう」と声を

掛ける。彼らより遅く入社したのはこれが初めてだった。

まず気づく。レターケース横の埃がなくなっていた。拭こう拭こうと思っていてそのままにしていたのは何日前だったか。

そういえば、入口の棚に花が活けてあった。

あんなのは今までであったろうか。

「おはようございます、どうぞ」と酒見がコーヒーの入ったカップを私のデスクに置いた。大昔に私が持参した私物だ。まだあったとは。

私がいろんなことに混乱して固まっていると、「あ、やっぱお茶のがよかったですか？」と遠慮がちな声がかかった。酒見は慣れないことをして少し顔が緊張気味だった。

「このカップどこから持ってきた？」

私は彼の質問には答えず、コーヒーに口をつけて尋ねる。濃くて美味しい。

「あの、実は迫田さんの代わりに茶を入れようとしたんですけど、たまたま通り掛った部長が、

食器棚の奥を指差して、課長はコーヒー党だ、と」

「部長が出勤しているのか？」

確か椎名は休みだったはずだがと聞くと、酒見は「さつきはいましたけど」と戸惑った顔をした。

今日出勤しない為に、昨日一度会社へ行ったのではなかったのか？と私は少し納得がいかなかった。朝まで仕事が終わらないような要領が悪い男ではない。私とは違うのだから。

何だかいやな予感が首をもたげてくる。長く勤めていると気づくこともある。気づきたくないことを。

私は電話を取る。椎名のデスクに掛けたが、出たのは総務部の女子社員だった。

「部長は？」

私の声が随分固いからか女子社員は少し言葉を絶句する。「本日は公休ですが」

「朝はいたと聞いている」

私が畳み掛けると、「私は見かけていませんので・・・少しお待ちください」と保留音。

私は保留音楽を聞きながら、内線や外線の通話ランプが色々光っている電話機を眺めていた。そこで妙なことに気づく。

保留が終わった。

「お待たせしました。確かに部長は朝いらっしやっていたようですが、今はおりませんし、公休となっているのもう帰られたかと」

女性社員の困惑した声を聞きながら、私は話題を変える。

「本日応接室Aの利用はあるのか調べてもらえないか？」

応接室Aは小さな個室だ。四人座るだけでも息苦しくなる狭さの上に、装具が古く、あまり対外用には使われない。常連の業者や、個人面談などに使われるだけで、電話だって形式的にあるオマケのようなものだ。その場所の外線ランプが先ほどから点いたままというのはどうい

うわけだ。

「どうしてでしょうか。業者の予定も入ってませんし、受話器が上がっているのかもしれないんですが……。今確認に行きますので」

赤く点いている外線ランプに椎名の気配がした。私は咄嗟に言葉が出た。

「いい。私が行ってくる。それと申し訳ないが、これから使いたいので、誰も通さないでくれな
いか」

「お客様でしたら、お茶でも」

「必要ない」と私は短く言い放つ。そして電話を切ると、立ち上がる。腰が痛い。昨日は甘く感じたこの腰の痛みも、今はただの暴力に感じてくる。私は頭の中で段々確信へと繋がる一つの結論を否定しようともがいていたが、気づくのはいつも遅く、事態が好転したことなど人生で一度もなかったことを思い出す。

「課長？」と訝しげにこちらを伺う二人の部下を見ながら彼らの行く末を案じた。

「しばらく席を外す。何かあったら・・・」と言いかけて、私は口をつぐむ。あっても私を探すことなどこの二人がしたことがないことを思い出した。

自虐的に出た笑いを隠しもせず、私は経理課を後にした。

応接室Aは二階の廊下の端にあつた。用事が必要になれば、誰も立ち入らない空間だつた。私は壁にある札を裏返して「使用中」と表示させると、ノックする。

小さい曇りガラスに見える人影は、少し動きをとめてこちらの様子を伺うような素振りを見せ、そして諦めたようだつた。

「はいりたまえ」

私の予感通り、中から聞こえてきた声は椎名の低音だつた。

「失礼します」

私は一言声を掛けて軽く頭を下げる。椎名は

ソファ―に背中を預け、腕を組み、複雑な笑顔を向けていた。

「なんのようだ？」

彼の着ているスーツは昨日の染みのついたものではなく、濃紺のそれであり、顔にも疲れが見られなかった。

「部長の方こそ私に話しがありませんか？」

「どういう意味だ」

「文字通りの意味ですよ。先ほど外線を使ってらっしゃいましたね。本社と話していたんじゃないんですか。経理部の解体について」

私は単刀直入に言った。

昨日の椎名は口を滑らせた。本社の指示があつて私の残業を見届けていたことを。残業代が私だけ膨大であるわりに仕事の効率が悪ければ鑑査対象になることぐらい予測できる。景気が低迷していて、部署の統合縮小などが当たり前のご時世だ。部長である男が理由もなく私に逢いにくるわけがなかったのだ。彼が私の残業に付

き合うようになって何日たっていただろう。きつと一週間程度だ。もっと長い意識があるのは私の妄想であり、願望だった。

「思っていたより、落ち着いているんだな」

椎名はこちらから目をそらして独白のように呟くと、私を向い側の席でなく、隣の席に座るように指示した。私は立ったまま「このままで結構です」と断る。どんなに睦言を交わしたところで、目の前の男は私の上司であることには変わりがなかった。

「いずれこうなる予感はしていたんです」

私はうすうす気づいていたが、それを勝手に誤解をしていた。彼の一言が私の目を覆い、耳を塞ぎ、ありえない願望を幻としてみせていた。私は今更ながら自分に呆れ、失望した。

「篠塚と酒見はどうなります」

私が二人のことを口に出すと、椎名は再びこちらを見上げた。瞳から何かを引き出そうとするのは無意味だと分かっているにもかかわらず、私は彼から

目をそらせなかった。

「あの二人は配置換えだ。篠塚に関しては、本社へ戻ることになるだろう。酒見についてはこちらの采配だ。これから検討する」

篠塚は専務の甥にあたる。躰と反省室代わりだった支店の部署が縮小されるのだ。旧体制が根っこにあるこの会社で、彼が本社に戻されなはずがなかった。仕事効率に難はあるものの、立場的には出世が約束されている身だ。

私が彼に何か与えることができたかは疑問だった。怒鳴ってばかりいた記憶しかない。酒見に関しても同様だ。

自嘲しかでてこない自分にうんざりする。私は口を歪めたまま、椎名と視線を絡めた。先ほどとは違い、彼の瞳に何か映っている気がした。「自分のことは聞かないのか」と椎名は私に言う。

「伺いましょう」と私は答えた。

正直私は聞きたくなかったが、目の前の男が

言いたそうだった。私は何の予測も覚悟もしていなかった。私の予想や希望などが、椎名という上司の行動や、ましてや会社の意志を言い当てることなどなかった。分かっているのは、残業代ばかりかさむ男を会社がこれ以上おいていても何のメリットもないということだ。

「なにを笑っている？」

ふいに椎名に声を掛けられて、私は笑っていたことに気づく。見返せば、彼の視線は上司のそれではなくなっていた。

ああ、そうなのか。そういうことなのか。

私は自分自身をようやく理解した思いがした。

「座っても？」

私が返事の前に椎名の隣に腰を掛けると、彼は頷きながらも首を傾げていた。

私は先ほどからずっと椎名の中で探していたものを見つけて安堵していた。昨日の一日が幻でもなく、偽りでもなく、確かに目の前の男だったのだと分かったからだだった。

「ひとつ告白をしましょう」と私が言うと、

「聞こうか」と椎名は静かに頷いた。

「私はずっとこの仕事をしてきて、自分にとってこれ以上向いている仕事はないと思っっていました。机の前に座って伝票を書いていれば一日が終わるし、経理なら一年ごとにゴールがあるから目標に向って走り続ければよいと思っっていました。ところが年をとり、人の上に立つ立場になると、私の周りには誰もいなくなっていることに気づいた。昔一緒に上司の悪口を言っていた同僚は誰一人として残ってはおらず、息子や娘でもおかしくない様な部下が付くようになって。私は上司というより、先に働いている先輩として、相手が間違った時は叱り、正しい道へのアドバイスをし続けたつもりでした。ところが気づけば私はいつも一人になっていて、何か間違っているのだろうかと思われ、暇はなく、孤独になって仕事は増えるばかりでした。私は歩んできた道を修正する機会を失ってばかりで、

こんな年まで歩んできた。私は自分の指導力の無さを棚上げにして、いつしか部下はまたきつと辞めていくに違いないと思うようになりました。その度に自分が頑張ればいい、と思うようになっけていきました。辞めていく人間に対して、孤独になっけていく自分に対して、もつと執着や愛情があれば、何かがきつと変わったのかもしれないと今更気づいたりしています」

私はそこで言葉を一度切る。椎名はこちらを見たまま口を挟まなかつた。彼は迫田の退職届けを受け取つて、いい加減気づけと私に言つていたのだつた。

「今日、机がきれいに拭かれていたんです」

私が急に話しの方向を変えたので椎名は不可解そうに首を捻つた。私は続けた。

「入口に花も生けられていた」

椎名は理解したように頷いた。

「ああ、あれは総務の子が当番制で各部署に活けているんだ。確か今日の朝は・・・ガーベラ

と聞いたかな、あの可愛らしい花は」

「今日気づいたんです」

「え？」

「何十年も出勤しているのに、今日気づいたんです。誰かが私の机を拭いたり、花を活けたりしていたことに。迫田が私にあんな仕打ちをしたのも今更分かりました。彼女は言っていました、気づいてないのよ、と。そう、私は何も見えてなかった。彼女は私に恨みや憎しみがあつたわけじゃない。気づいて欲しかっただけなんですよ」

隣の椎名は私を黙って見詰めたままだった。しばらく無言だったが、小さなため息と共に彼が口を開いた。

「迫田くんは君に怒られた事がない、と言っていたぞ」

「え？」

「迫田くんがおれに退職届けを持ってきた時な、正直おれはまたかと思ったんだ。君が怖くて辞

めるのかとね。一応原因を聞くと、彼女は叱られないからと答えた。おれは君から優秀な女子社員だと聞いていたので、優秀だから叱らないだけだと言ったが、彼女は首を振った。仕事は簡単なものしか与えられていないし、やりがいのある仕事は篠塚と酒見ばかりがやっていて、疎外感を感じると言う。・・・なあ、迫田はあの日君に嫌がらせをしたのがばれたんだろう？君はどうしたんだ」

「私は」と声を詰まらせた。「席についていた彼女に、再び茶を頼みました」

きっかけは。彼女が急に飛び出した切っ掛けはそこにあつたのか。

「彼女は叱って欲しかったんだそうだ。叱れることで君が自分に無関心じゃなく、期待されていると思いたかったんだよ。君は何があっても彼女を注意しなかったそうじゃないか。前に帳簿の桁が一つ違って、報告書で常務に吊し上げを食ったことがあつたらう。君は彼女に注意し

たのか？していないだろう。してくれなかったと彼女はおれに言ったよ。いつも何も言ってくれないから、わざと一桁増やしたと」

私は愕然とした。確か入社して半月がたった位の話だった。彼女は無口で私の手を煩わさなかつた。あの間違いも彼女らしくないなと思つたが、注意するほどではないと思つた。最後に私がチェックしていれば防げるミスで、私にも非があつた。いや、それは詭弁かもしれない。本当は叱ることでまた辞められるのではないかと恐れていた。

「鏡、どんなに愛情を込めて人と接していても一〇〇パーセント部下が辞めないことなどありえない。辞める原因なんて一概には言えないものだ。恐らく複雑に絡み合っているのが常だとおれは思う。それでも指導だけに関して言うなら、おれは君のやり方は間違っていないと思つているよ。おれのように八方美人で誰とでも仲良くできるっていうのは傍から見れば円満に映

るかもしれないが、蓋を開ければ薄っぺらい絆だ。君の指導を信じて受け入れてくれる部下が残っている。それでいいじゃないか。過去の人間は叱られすぎて去っていった、今回は叱らなかつたから去っていった、それだけのことさ。君は君自身が思っているほど嫌われていないし、孤独でもない。ずっと残っている篠塚や酒見がいい例だよ。まあ部下が辞めていく率としては君のところが一番多いから、少しは数字だけじゃなく、花を観察するぐらいの余裕はあったほうがいいとは思うがね」

冗談っぽく椎名は言って私に微笑み掛けた。そして、今度は私の手を握手するように握ると、その上に左手を添えた。その握り方は、これまでの会話の内容と違和感を感じた。不信感を覚えて椎名を見返すと、彼は予想通り口調を変えてきた。

「鏡。聞いてくれ。先ほどの処分の件だ。本社は各支店の経理課を解体して、総務課会計係を

置く事に決定したそうだ。新たな係は、本社までの中継地点程度の業務のみに限定される。今までの決算処理は外部に委託し、企業の請求、入金管理は本社に新たな部を設立、一括管理体制となる。・・・本社は、君に任せたいと言っている」

私は我が耳を疑った。「なにをバカな」

「本当だ。まだ決定ではないが、本社ではそういう人事案が出ている。タネを明かせば、経理課解体の裏には各支店での使途不明金があったんだ。おれは本社から頼まれて隠密にこの支店の調査を一週間ほどさせてもらった。最後の遣り残しは君のところだね。ずっと残業ばかりしるから夕べまでチャンスがなかった。申し訳ないが夜中に机をひっくり返させてもらったよ。当然何も出なくて、無駄足だったと本社に報告したが。そして先程本社から各支店の顛末を聞いた。どうやら古狸どもは多かれ少なかれプール金を作っていたんだそうだ。内部告発による

一斉摘発ってわけさ」

「道理で。あなたが、ただの好意だけで残業に付き合っているとは思ってませんでしたよ」

私のそんな皮肉に、椎名はバツが悪そうに顔を歪めた。

「汚い行為も仕事の内さ。でも君が好きなのは本当だ。きっかけはこんな形になったが」

「分かっていますよ」

私はそう頷いた。今の瞳の中は上司の色ではなく、椎名の感情が溢れている。目は口ほどに物を言うとはよく言ったものだ。残業中も彼は私をこんな目で見詰めていただろうか。いや、あの時は、いつになったら私のデスク周りを調べることができると、と呆れ、腹を立てていた毎日だったはずだ。しかし、緊張と集中はそう何時間も続かない。夜中についてぶつりと上司である意識が消えたのだ。それが、私に対する告白したあの日なのだろう。

しかしながら、私は経理課の解体となれば、

てつきりリストラの対象か、それに順ずる何かの処分にされると思っていた。それがいきなり栄転などとは恐れ入る。本社は何を考えているのか。

「一人の残業代などたかが知れている。そんなことで長年勤めている君をクビになどしないさ。君は自分が思っているほど評価が低いわけじゃない。それより、もし君に意志があるなら本社の部長職だぞ、大出世じゃないか」

隣の椎名は屈託のない笑顔でそう言った。

「部長は」と私は聞いてみたくなった。

「部長は」どうして欲しいんですか？」

「おれの意見は関係ない」

椎名の言葉はもつともだったし、私は彼のそんな答えを予想をしていた。しかし、想像していた以上に私は傷ついた。

「思ったより喜ばないんだな」

隣の男はそう呟いた。私は握られている手を外した。この手の意味するものは上司としての

意識で、添えられていた左手こそが私が求める意識のような気がした。私は左手をとって指を絡めた。椎名は上司としての顔を露骨に崩して頬に朱を走らせた。

「不思議なものですね」

「うん？」

「私は今まで部長が苦手で・・・いや、この表現はちよつと違うかな、嫉妬というか憧れというか・・・自分と同世代で出世頭であるあなたを見ていると、私のコンプレックスが益々刺激されて辛かった。ところが、あの夜、ほら部長が私に告白をしてきた日です。びっくりしましたよ。なんだか初めて春が訪れたみたいでした。私はあなたが男だということも上司だということとも一瞬忘れて、ああこんな私を好きだといってくれる人がいるのかと浮かれてしまいました。ところが、一日たつとまた不安になりました。あれは本当に現実だったのだろうか、と。そう思っている時に、昨日のような」

私は言葉を詰まらせた。昨日の情景を思い出
し、顔が熱くなる。

「昨日のようなことが起きて、よかった錯覚で
はなかったのか、とほっとした。ところが職場
であなたを見ていると、また信じられなくなっ
てきて、私は何度も何度もあなたの言葉や反応
を確かめて、ほっとするのを繰り返している。

もし私が本社になんて行ってしまったら、また
不安になりそうで怖いんですよ。嫌われている
のではないか、あれは幻ではないか、私はまだ
孤独ではないのか」

私が呻くように訴えると、椎名は優しい目で
私を見詰め、絡めていた指を深くした。

「毎日電話するよ。おれを忘れないように」

私は、あっさりそう言われて身体の力が抜け
てしまった。私が初めて執着した男は、距離や
立場など、変わっていく環境に順応する能力を
持っているようで、私の悩みなど取るに足らな
いことのようにだった。いや、もしかしたら、経

理課の解体の話が出ている時から、何度も何度も彼の中で自問自答を繰り返しての笑顔なのかもしれない。

正直私は残りたかった。今まで通り彼の近くにおいて、この幸せな気分を堪能し続けたかった。しかし、そんな状態は長く続くわけがないことも分かっていった。私がこのままここに残れば、おそらく別部署に移動させられるだろう。今まで培ってきた経理のキャリアなど全く関係ない部署に。未来の私はそれで満足するだろうか。椎名はきつと今後も出世し続ける。彼への愛情よりコンプレックスが上回る日がこないと言い切れるか？私は私で誇れる何かを持って前進していくべきではないのか。

「鏡、おれは君が好きだ」

椎名は考え込んでいる私をそんな言葉で我に返してくれた。

「私もあなたが好きです」

驚くほど簡単に私はそう口にしていった。照れ

も何も無い、ただの本心だった。私のそんな告白に、椎名は感慨深げに頷いた。

「ありがとう、とても嬉しいよ」

私たちはしばらく見つめあった。絡ませた指をもてあそびながら、私は彼のキスを待っていた。しかし、こんな場所で椎名がそんなことをしないことを私は知っていた。

絡ませた指がほどけて、視線も椎名の方が先に外した。ゆっくり彼は立ち上がり、ドアの前に歩いていった。

「出ないのか？」と椎名はドアを少し開けて私を叩いた。私は苦笑しながら立ち上がると、先に廊下に出た。

長いような短い距離を私たちは並んで歩いた。私たちは無言だったが、居心地はよかった。時折椎名に目を向けると、彼はすぐにこちらに反応を寄越した。声を掛けずとも通じるこの現実には私は大いに照れてしまった。

「先程の件、前向きに考えておきます」

経理課に到着した時、私は椎名にそう告げた。彼は満足そうに頷くと、時計を見て「おれはもう帰るよ」と言った。

数歩離れて、私が経理課のノブを回したときに、椎名が突然こちらを振り返った。私が首を傾げると、「電話するよ」と一言、無邪気な笑顔を向けた。その笑顔は幼く、まるで少年みたいでいとおしく。

私は思わず微笑みながらドアを開けた。誰かに好かれているということ、私を幸せにし、安らぎを得られるものだなと今更ながら気づいた。

相手が男であれ、上司であれ、孤独じゃないことは、私を安堵させ、感動させた。初めて自分の存在理由を見つけた気がした。これは決して大げさな話ではなく、私は彼の存在に心から感謝した。

本社から正式な辞令がおりたのは、それから一ヶ月後のことで、その人事は誰もが驚くほど

大規模なものだった。裏事情を知っている私としては、降格、または依願退職扱いの各重役たちが裏金に関わっていたことに気づいたが、その一人に当社の支店長まで加わっていたことには度肝を抜かれた。まさかとは思ったが、あの時椎名はここがクリーンだったとは一言も言わなかったことを思い出した。

私は彼が言っていた通り本社の経理部の部長職に栄転、篠塚も本社行きとなり、また私の部下となった。退職となる支店長の後釜には、椎名の名が記されており、結局私は一瞬たりとも彼の上に立つことが適わなかったことに苦笑した。

「まあ私の方が手取りは上だからいいか」と私に負け惜しみを言うと、椎名は賃金の地域格差の問題を取り上げ、一時間の弁論へと発展させた。つまりは、彼は約束どおり毎日私に電話をかけては、ドラマや野球、ゴルフのことなどを延々私に話し続けたのだった。私は彼の一方的

な趣味を、これまた一方的に聞かされる苦痛を少しでも緩和しようと、余暇の大半を彼の話題を理解するのに費やした。おかげで部下とも仕事以外で二三世間話をするようにはなつたのだが。

「ようやく人生が面白くなってきましたよ」

私は楽しそうに話す椎名に向つて、そう本音と皮肉を混ぜて笑つたのだつた。

了